

# いまなぜ〈対話的保育〉か

加藤繁美 KATO Shigemi

## ——なぜ「対話的保育」か

山梨大学の加藤と申します。私のほうからは、対話的保育とは何かということで、話をさせていただきます。

最初から結論的なことを言うようで申し訳ありませんが、おそらく対話的でない保育というのは、ありえないと思います。乳幼児を育てるという営み、実は学校教育も同じですが、子どもと大人、子どもと子どもが対話的に関係を作らない保育・教育の場はおそらく存在しないのだろうと、僕は思っています。ただ問題は、対話の質がどのようなものであるか、対話の思想が一人ひとりの教師・保育者の中にどのように作られ、具体的に表れているかという点にあるのです。

そうした中、今対話ということを中心に保育実践のあり方を考えなくてはならないと考えた理由は、大きくいって二つあります。一つは、対話的保育が子どもを救うということ。ここを丁寧にしないと子どもが救えないという思いです。もう一つは、対話的保育が社会を変えろということ。学校教育は窮屈な感じがますます強まっていますが、乳幼児の保育はフリーにデザインできる可能性があります。そこで乳幼児の保育を起点に、この国

の子どもをどう育てるかということを保育実践として問題提起する時代ではないかと思えます。この国に生まれて20年間育つと、一体どういう力を持った大人になり、社会の一員になっていくのか。そのことに実践の現場は、どう責任とろうとしているのか。そういう議論を、対話という思想を切り口に切り開いていきたいと考えているのです。



新しい世界の価値を構築していこうとする時に、自分の考えが全てだということで、他人の考えを認めないということは、おそらく許されないでしょう。でも、実際にそういう国があります。そういう生き方も違い、自分の国だけ豊かになればいいという生き方も違い、地球上のいろんな人が、いろんな価値を持ちながら生きる。そのことを大事にしながら、しかし自分たちの主張もいっしょに加減にしない。主体的であるけれども、いつも協同的に生きようとする。自分と異なる他者と関わる力を持つ。そういう人たちで作られた国を構築していくべきではないか。そういったことを、赤ちゃんから6歳までの人格が作ら

れていく大事な時期の教育のあり方を通して考えたい。教育全体の問い直しをしたい。僕は、そういう大きな思いで、対話的保育が社会を変えたいと言っています。

### ——子どもの育ちがおかしい

一つ目の「対話的保育が子どもを救う」ということについてお話ししましょう。このことを考えるようになった一番のきっかけは、90年代に入る頃から保育の現場で多く聞かれるようになった悩みにあります。保育園、幼稚園を問わず、子どもの育ちがどこかおかしい。子どもたちが6歳になっても、心理学のテキストに書いてあるような6歳には簡単に育たない。自分らしい誇りを持った子どもに育っていかない。そういう事例に数多く遭遇するようになりました。特にこの5～6年は、かなり深刻な事例と出会うようになってきています。

2年前に東京のある保育園の園長先生に頼まれて園内研修に行きました。8月に依頼を受けたのですが、スケジュールの都合で1月に行ったら、大変な状況になっていました。前日に園長先生からファックスが送られてきたのですが、読んでびっくりしましたね。こんなことが書いてあるのです。「4～5月はいろいろあったけれども、6月中旬に、F君という1人の男の子の暴力的な行動があらわれたことがきっかけで、他の子どもに波及し、あっという間に学級崩壊状態になりました。1人担任だったところを、複数で見なければどうにもならなくなり、ピークだった運動会前後は4人がかりという時もありました」。5歳児のクラスで18名です。通常は18名を1人担任でやっているのに、4人がかりで保育

しないとやってけないというのです。子どもが大変って言うけれど、事情を知らないと、先生方の能力に問題があるんじゃないかと思っちゃいますよね。でも続きがあるのです。「いろんな専門機関の先生の指導を受けながら保育を進めていますが、虐待を受けている子が3名いて、専門の先生のお話では厳しい状態ということでした」。それは誰でも厳しいと思いますよ。18名のうち3名が虐待を受けていて、同じクラスにいるのですから。

問題は深刻です。なぜ6月にこのような問題があらわれてきたかということ、問題の中心のF君という子どもの両親が離婚したのが6月だったのです。虐待し続けてきたお父さんがいなくなって、この子の平穏な生活が始まると先生方は信じていました。一生懸命丁寧に、子どもの自我形成の立て直しを図ろうとしていました。ところがそこから園で荒れたのです。原因は中一のお兄ちゃんです。F君のお兄ちゃんは12～13年、ずっと父親から虐待を受け続けてきたのですが、その父親がいなくなったことで、家の中で見境なく暴力をふるうようになったのです。母親を殴り、家のものを壊す。F君にとってはお兄ちゃんの鉄拳が、いつ飛んでくるかわからない状況です。家の中でびくびくして過ごして、そして園に来る。それで園の中で腹が立ったときに、他の子どもにワーッと暴力をふるったら、自分が兄ちゃんにやられている時と同じ状況が起きた。母親が自分を守るように保育者が他の子どもを守った。つまり家と同じことがクラスの中で起きることを知るんですね。それからです。彼は何か嫌なことがあると、家で兄ちゃんがやるように見境なく暴力を振るい、他の子にぶつかっていく。そんなことが続いているのだそうです。園長先生の手紙にはこ

う書いてあります。「徐々に落ち着きは出てきましたが、まだ危うい状態です。昨日の散歩ではF君、U君、R君はつるんで帰ろうとせず、SOSの電話で事務所から迎えに行くと、途方にくれて座り込んでいる担任を前に、3人とも、あざけるようにブランコに乗って楽しんでいました」。

園内研修に行くと、担任の先生からのレポートがあって、これがさらに深刻でした。F君の生育歴から今までの状況が書かれています。27kgという大きな子どもなのです。この子が「友達を蹴って泣かす。保育者の髪の毛を引っ張る。頭突きをする。パンチをする。そして袖を一生懸命押さえて止めるしかなく、そうすると抵抗するものの、おう吐をしたあとしばらく眠り、起きたら赤ちゃんがえりする」。こういうことが繰り返されている5歳の子ども。この子が荒れると他の2人が同じように荒れる。3人が同時に荒れる時には1人の担任ではどうしようもなく、3人に1人ずつ保育者がついて、あとの15人を1人が見る。それで運動会前の練習の時には4人がかりという、とんでもない状況になってしまったのです。4人がかりがいいかどうかはわかりません。きっとよくないのでしょう。

先生たちは、何が大事なのだろう、何が足りないのだろうと議論してきました。F君を見捨てることはできない。そんなことを保育者に思わせたのは、暴れる時にこの子が語る口癖でした。「俺を階段に連れて行け。飛び降りて骨を折るから、全部骨折って死んでやるから」。「はさみ持って来い。おなかに刺してやるから」と。園外保育の時にトラブルがあると「車にひかれて死んでやる」と飛び出していくのです。そう言いながら、「どうせ俺なんか、どうなってもいいんだろう」と叫

ぶ。これがF君の口癖で、この4つの言葉を繰り返しながら生きているのです。

18人の年長クラスは、F君が暴れる、F君に触発されてあとの2人が暴れる、という状況で、みんなが仲間になって価値的なことを一緒に作り出していく5歳児らしい集団とは程遠い状況で1月まで来てしまいました。「あと2ヶ月で、何ができますか」と尋ねられて、「2ヶ月では無理です」と答えながらも、「それでもやれることがあります」と言って帰ってきました。

ここまでひどい事例がどこでもあるとは言いません。けれども似たような話をいろいろなところで聞くようになりました。そして保育者にとってはしんどいことですが、おそらくこれからもっとそういう問題は増えていくだろうと思います。

集団が集団として形成される前提として、自分らしく生きる力の基礎や自我の構造は、4歳の後半ぐらいまでに子どもの中に獲得されなければなりません。ところがそれを獲得しないまま5歳になってしまう子どもが増えている。するとそういう子どもに振り回されて、集団そのものが未形成のまま小学校に送り出さざるを得なくなります。そのような状況の中で、今保育者に求められるのは、赤ちゃんから6歳まで子どもが人として育っていく道筋を、意識的、計画的、組織的に、しかしながら自然な形でデザインすることにあります。子どもの育ちをデザインして形にする力が今ほど問われている時代はない。現代は、幼稚園・保育園の専門家がいないと、心地よく仲間と一緒に生きる4～5歳の姿を作り出すことが困難な時代です。それだけ、幼稚園・保育園の果たすべき役割が大きい時代なのです。

## ——対話的關係における育ち

では0歳の頃から6歳くらいまでの子どもに、どのような関わりを丁寧にすることが大切なのでしょうか。この問題を僕は、10年前くらいから、子どもの自己内対話能力の問題として考えてきました。でも今は、自己内対話能力という言葉にこだわらず、対話する力、対話的關係の中で子どもが自分らしく育つ、そういった視点で捉え直しています。

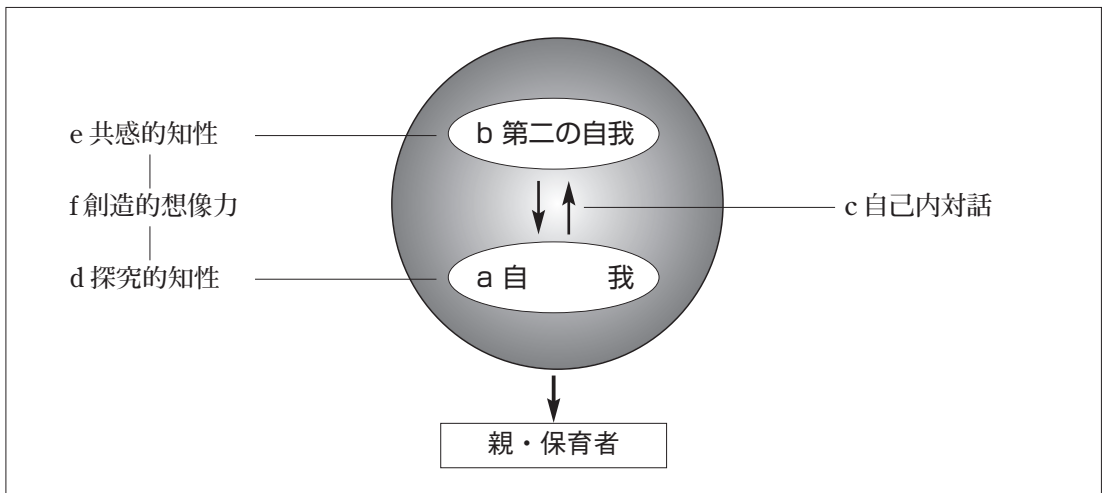
赤ちゃんが親と対話する。親が子どもの気持ちを理解し、それに応答的に返していく。そういう関わり方の積み重ねで、子どもは大人の気持ちを自分の中に取り込むことができる。そのような育ちを、僕はこのような図を描いて説明してきました(図1)。

1歳半ぐらいいまでに、子どもが外の世界に興味・関心を持つようになる。そして1歳半～3歳ごろ、この自我の世界を確かなものに育てていく(図1a)。2歳児というのは手に負えないくらいに自己主張の力が育ってきます。2歳児は自我の塊です。どうしようもな

く難しい時期になってくるのです。「僕はこうしたい」と言ったら、それにこだわります。言葉で自分の願いを表現した、その自分にこだわるのです。だから扱いがすごく難しいのですが、いい親ならば、せっかくなつくたご飯を「嫌いだから食べない」というようなことも、きちんと受け止めてくれます。いい親や保育者は、どんなわがままに見える自己主張も、「ああ、あなたは自己主張が言えるようになったんだね」と言いながら、優しく受け止めていくのです。そのような受け止める感覚が、子どもと一緒にいる大人には必要不可欠です。

2歳児は「僕、人参嫌いなの」なんて言ったときに、「ああ、人参嫌いなんだ」というふうには、子どもよりも少しゆっくりめに、優しくてちっちゃい声でしゃべると、受け止められた感覚を持ちます。すると2歳の子って、必ずといっていいくらい、すごく偉そうになるんですよ。「僕、嫌いなの」なんて。そこで親や教育者が「威張ってる場合じゃないでしょう、だめ、食べなさい」なんて言うと駄目なんですね。きちんと受け止めたら、「で

図1



もね」と優しく切り返していくことが必要です。そのように育っていくうちに、子どもの中に受け止められて返してもらった世界が、社会的な知性、あるいは社会的な自己になっていきます。これをワロンという人は「第二の自我」という言葉で表現しています(図1 b)。これが2歳の頃育ち始めて、3～4歳で子どもものものになる。そして4～5歳になると、この二つの自我世界をつなげて自己内対話ができるようになる(図1 c)。今、なかなか子どもに育たないでいるのが、この力なのです。

もっともそうは言うものの、自己内対話能力だけを育てる保育はありません。4歳の子が、自分の内側を向いて哲学しながら生きるのは重いでしょう。子どもたちの中に、心地よく、この二つの自我世界がつながる世界をつくるのが保育者の力です。それを保育カリキュラムとして、あるいは保育の実践としてつくり出すためには、3歳までは個別な関わりが重要になります。しかし3歳以降は、バランスが崩れた子どもがいることを理解しながらも、その子に個別に振り回されてはいけません。

では3歳以降、一人一人の子どもの中に、自我という世界、第二の自我という世界は、どのような知的世界として広がっていけばいいのでしょうか。そして自己内対話をつなげる力を豊かにする保育は、具体的にはどのような実践になるのでしょうか。

具体的には三つのことを考えています。一つ目は探究的知性です。自我というのは自己主張という言葉に置き換えられると考えられますが、これが3歳過ぎてくると、物事を「面白いな」とか「不思議だな」というふう考える探求的知性という言葉で表現するこ

とのできる力に育っていくのです(図1 d)。赤ちゃんの頃に育つ、ものに対するこだわり、ものを手に入れたいという願いが、この自我の世界の根っこにあります。それが3歳過ぎる頃から、ものを不思議がる気持ち、ものを面白いがる気持ち、科学する気持ちになる。例えばダンゴムシ捕まえたら「ダンゴムシは面白いな」とか、カエルを捕まえたら「カエルは面白いな」とか、泥団子つくる子は「固い泥団子つくるぞ」と思ったら必死に知性を働かせるとか。ものに対してこだわりながら生きる身体的知性といってもいいでしょうね。そのようにものや環境と関わっていく力が広がっていく。ですから幼稚園や保育園は、環境が豊かな中で、不思議に感じる心を刺激し組織することが大切になります。

次に、第二の自我、これを共感的知性という言葉で表現したいと思います(図1 e)。第二の自我は、最初は借りものです。大好きな先生や大好きなお母さんが大事だと言うから大事、というところから始まって、親や保育者の背後にある文化との対話が始まります。本の世界、歌の世界、音楽の世界、そういった文化の中に込められた大人の願い、それを子どもが自分の中に取り込んでいきます。人はこういうことを大事にするのだということ、私達人類がつくり出してきた多様な文化の物語を、個別の親子関係を超えて取り込んでいくのです。ここがうまくいくと物語的にものを考えるセンスと、不思議だなと思いつつながら社会に向き合う知性、この2つの知性の豊かな子が育つでしょう。

三つ目は創造的想像力です(図1 f)。未来をつくり出していく子どもの力、存在しない未来をつくり、それを共有していく4～5歳の力です。探究的知性と共感的知性をつなげ



ていくと、子どもの中にある「僕はこれが面白い」という世界が、4、5歳くらいの共同的な活動の中で、仲間と一緒に広がっていく。仲間と一緒にある物語世界を表現したいという願いが、この2つをつながげながら生きる生活に変わってくる。そこへ誘う保育者は、子どもの探求的知性、共感的知性、そしてそれをつなげる創造的想像力、あるいはイマジネーションを引き出していく保育実践をつくっていかねばなりません。

そのような実践を対話的に展開していく。対話的というものは、子どもが自分のやりたいことを聞き取ってもらい権利を保障されながら、それを「私たちの世界」へとつなげてもらう。そうすると仲間の中で誇らしく生きる子どもが育つと思うのです。そこで僕は、対話という言葉にこだわりながら、保育のカリキュラムを再構築してみようと考えたのです。

### ——対話する保育実践 「カエル事件」から

対話的保育。最初にも言いましたが、特別な保育ではありません。保育というのはそもそも、保育者が子どもにこんなことをさせたいという思いと、子どもがこんなことをしたいという思いとがつながりながら展開されるものです。だから対話的なのです。ただし、対話するといっても、実際には難しいです。どう難しいかを具体的な事例で述べます。

僕は全国で実践した保育を記録に書いてもらっています。長野県の保育者たちの記録の中に面白いものがありました。「カエル事件」を紹介しましょう。「3～4歳の子の探求的知性と対話する保育をつくってみましょう。つくったら書いていきましょう」。そのように問題提起したら、3歳の担任の人が一生懸命

に書いてくれたものです。

長野県の田舎の園です。4歳児のハヤト君とマミちゃん、0歳から一緒に保育を受けている子たちです。7月23日に次のような記録を保育者が書いています。「毎朝8時に登園するハヤト。同じぐらいに登園してくるマミと、未満児の頃から同じクラスで仲良し。二人で戸外遊びをしていると、クラスの子どもが保育士のところへ走ってきて、『先生、ハヤト君とマミちゃんが、お口拭きの袋に、カエルたくさん集めとるに』と言ってくる」。マミちゃんのお口拭き用タオルの巾着袋があって、そのタオルは部屋にポイッと放って袋だけ持って行って、カエルを入れたんですね。それを告げ口する子がいるんです。そうしたらまた先生が行っちゃうんです(笑)。「すぐに二人のところに行くと、マミのお口拭きの袋に、20匹ぐらいのカエルが詰め込まれ、ピョンピョンと苦しそうにしていた」。

それで「何でこんなことしたの」。いきなり怒るんですね(笑)。探求的知性、カエルに対する探求心を伸ばさなきゃいけないのに、頭ごなしに叱っているのね(笑)。「何で」って、そんなこと聞いても仕方ないと思うのですが、子どもは言うんです。「だって、カエルいっぱい捕まえたかったんだもん」。見ればわかることですね(笑)。「でもカエルさん、苦しいよと言っとるに。死んじゃったらどうするの」と言ったら、子どもは反応できない。そして「それにマミちゃんの、この袋。これはカエルさんを入れるための袋?」「違う」「二人でカエルさんを返してきなさい」と言われて、返させられるんです。探求的知性どころじゃないでしょう(笑)。

ハヤト君とマミちゃんは遅番の先生にも怒られてしまいます。園で一番怖い先生らしい

んですけど。そしてその先生が担任の先生に注意するんです。それで次の日、また担任の先生から怒られるんです。「昨日もお話で、今日も同じことで、もうカエルさん怒っとるわ」「もう二人は、カエルさん捕まえちゃいかんだよ」って。どうしてこんなにカエルを捕まえてはいけないのか、僕にもよくわからないのですが(笑)。皆さんならどうしますか。怒りますか。ただ捕まえさせますか。僕はこの記録を読んで、「子どもには、子どもの思いがあります。その思いを発展させる。それをイメージするのが、対話の保育なんですよ」と先生たちに言いました。それで先生たちは反省して、この子たちの思いを何とかしようと考えた……。

でも次の日、また先生は怒るんです(笑)。クラスの分担作業で草取りをやった時に、「先生、ハヤト君が水道のところの穴にカエルいっぱい入れとるに」と子どもがやってきた。行ってみると、ハヤト君とコウちゃんが、水道の元栓の穴の中にたくさんのカエルを入れている。それで「何しとんの。カエルさんやめてよって言っとるんじゃ？ 見てみい。それに、みんなの使う水、出なくなっちゃうよ」って叱る。そうしたら、子どもが「だって、カエルのおうちにしたかったんだもん」って言う。先生は「カエルのおうちは、ここじゃないでしょう」って怒るんですけど、「ああ、カエルのおうちにしたかったんだ。じゃあ、こんな狭いところじゃなくて、大きなカエルの住む所をつくってあげる」なんて言ってあげればよかったですよね。

でもこの後、カエル事件は面白い実践へと展開していったのです。先生たちは考えました。「飼育を今からさせても、わざとらしいし」。そうですね、そういうわざとらしいの

は嫌ですね。それで、この子たちはどうしてこんなに捕まえたんだらうって考えたのです。面白いからです。ではこの面白さをどう発展させるといいのでしょうか。そこで1人の先生が言いました。「以前、ヤゴを『トンボにするんだ』とやたら捕まえた子がいて。それを飼っていたら、ヤゴってトンボの種類によって形が違うのよね」って。それは先生にとって大発見だったんですね。「大きい、小さい、細い、太いのもいて、結構面白かったのね。それで飼っていた子どもをヤゴ博士にして、『ヤゴ博士に、何でもヤゴのことをきいてください』と言ったら、急に人格が変わったみたいに張り切っちゃって」って。その話を聞いて、カエルのクラスの担任の先生は「私、やってみます」と言いました。

先生は次の日に朝の会で言います。「実はこのクラスの中に、カエルのことなら何でも知っているカエル博士が2人います」。素直な先生ですね(笑)。そうしたら2人が怒られるかなと思ながら前に出てきます。先生が「この2人は、毎日のようにカエルを捕まえています。20匹ぐらい捕まえて、怒られたこともありました」と言って、2人はしょぼんとしている。でも続けて先生が「2人はカエル博士で、カエルのことは何でも知っていますから、皆さん、カエルのことについて聞きたいことがあったら、何でもきいてあげてください」と言うんです。それで「園に何種類カエルがいますか？」って尋ねると、2人が「アオガエルとヒキガエルと、4種類います」と答えて、他の子どもたちは「わぁ」って感心する。「今まで捕まえたカエルで、一番大きいのはどれぐらいですか」と尋ねると、2人が「ヒキガエルのこれぐらいのが、一番大きかったです」と答えて、また子どもたち

は「わぁ」って感心する。

そのうちに2人は、やたらとカエルを捕まえなくなりました。それで他の子がカエルを見つけると、「マリちゃん、マリちゃん、カエルおったに」って呼びに来るんです。アドバイス係ですね。他の子が捕まえて「どうしよう」って言うと、マリちゃんが「部屋で飼うといいよ」なんてアドバイスして、結局、飼うことになるのです。先生はカエルを飼ったことがありませんでした。「カエルは生きたものしか食べないんじゃないの。あんたたち、毎日ハエを捕まえられるの」って言うと、子どもたちは「捕まえる」って言います。でも捕まえられると言っても、実際には捕まえられないんですよ。どんどんやせ細っていくでしょ。そうしたら子どもが調べてきた。別に生きて動物じゃなくてもいい。動いているものに食いつくのであって、生きていかどうかの問題じゃない。たんぱく質の食べ物を糸に付けて目の前でゆすると、パクッとくる。そこで晩ごはんの残りを持ってきて食べさせ

ると、大きくなっていく。そうやって飼育していったのです。

なぜこんなことが起きたのでしょうか。子どもはカエルが死んじゃうと思って必死で探してきたんですね。その必死さがつながっていく。子どもの思いと思い、願いと願いがつながっていく。小さな実践でいいから、このように子どもの思いと思いがつながっていく実践を幾つも園の中に作っていくと、自分とうまく付き合えずに荒れている子どもたちも「みんなと一緒にいろいろやるって、おもしろいじゃない」って思っていくんじゃないでしょうか。僕はそう考えて、子どもの願いを受け止め、それを仲間の思いへとつなげていくような対話的な実践を、乳幼児の保育の中でやってみましょう、考えてみましょうと問題提起しているのです。

それがなぜ社会を変える力になるのか。それはあとで時間があれば議論してみようと思います。時間がきていますので、一応ここで終わることにします。以上です（拍手）。